

四二九七番

をみなへし 秋萩しのぎ さ雄鹿の 露別け鳴か  
む 高円の野そ

六年正月四日に、氏族の人等、少納言

大伴宿禰家持の宅に賀き集ひて宴飲する歌三

首

四二九八番

霜の上に あられたばしり いや増しに 我は参  
る来む 年の緒長く

四二九九番

年月は 新た新たに 相見れど 我が思ふ君は  
飽き足らぬかも

四三〇〇番

霞立つ 春の初めを 今日のごと 見むと思へば  
楽しとぞ思ふ